

奥会津・只見川 深山幽谷・霧幻峡の渡し

輝く新緑
幻想的な白霧
錦秋に燃え立つ溪谷
そして厳寒の鮮烈な雪景色

深山幽谷と呼ばれる霧幻峡
の感動的な四季のうつろい
を昔ながらの復活した渡し
舟でお楽しみ下さい



忘れ去られた風景がここにある…
懐かしい、あの感動がよみがえる。

◎只見川

日本の原風景といわれ、
冬は 30 億トンの降雪に
埋め尽くされる日本有数の
豪雪地帯を、
延々と貫いて流れ下る悠
久の大河が只見川です。
その源を尾瀬に発し、会津
平原で阿賀川に合流し新潟
は日本海まで
高低差 1.165m、長さ 272 k
mを一挙に流れ落ちていま
す

その激流を利用して、江
戸時代はお蔵入りと呼ばれ
た奥会津の、秘境の原始林
から切り出されブナや杉、
松等の巨木が、筏流しや、
さながしの手法で、新潟か
ら江戸、大坂まで運ばれた
歴史があります

そうした急峻な地形を持つ只見川は、戦後には電源開発が行われ、田子倉発電所や、奥只見発電所が建設され、日本国経済の戦後復興に大きな役割を果たしました。この屋形船の遊覧コースも、東北電力の宮下発電所調整池にあり、上流には上田発電所。下流には柳津発電所が建設されています。水系の総発電量は 216 万キロワットを誇り、只見川は電源開発の川としての顔も併せ持っています



⑨赤岩



岩肌が赤いことから、そのまま赤岩と呼ばれています。
只見線が昭和 38 年に開通してからは、三更集落と対岸の早戸駅間を結ぶ最短手段として和船渡河が主流になり、集落の子供達は小学校に上がる頃は、一人前の船頭として、誰でも自在に和船を漕いで、この川を行き来することが出来ました。
それは三更集落が廃村となる日まで続くこととなりました。

⑩JR 早戸駅



JR 只見線の早戸駅です。只見川の絶景に佇む無人駅として人気があります。早戸温泉つるの湯の一番近い駅がこの早戸駅です。

⑪館の岩 (たてのいわ)



只見川溪谷を睥睨（へいげい）して屹立する館の岩の山上には、かつては山城が築城されていました。

その時期については、源頼朝が奥州を支配した文治 5 年、それに従った山ノ内支配の末期の頃の事で、

「会津封内古墨記」によると「早戸の柵、東西 28 間、南北 27 間天正の頃佐久間新蔵人住」とあります。

周辺にはそれを伺わせる馬場尻や的場等という、戦国武士の居館の面影が今にとどまり残さ

れています。

文和 4 年（1355 年）5 月大規模な山崩れが起こり、湯の平真言宗小林寺が埋没。集落は危険な状態となったために、全村ことごとく早戸居平に移住したと伝えられています。

⑫ブナ坂崩れと堂岩崩れ

ここ霧幻峡は、通称は三更集落と呼ばれていました。昭和39年4月16日午前6時、三更部落背後の上部山腹（通称ブナ坂）が、大音響と共に崩壊し、一瞬の内に部落を埋め尽くしました。

崩落地では、凝灰岩の上に、沼沢火山の噴出物が堆積したいわゆるシラス層の中に、硫黄の鉱床が発見されて、昭和28年から大規模な硫黄の採掘が行われていました。急傾斜地に堆積したシラス層を蜂の巣状に大きな採掘の穴が掘られたための悲劇でした。

崩落は4次に分けての地滑りだった為に、死傷者こそありませんでしたが、戸数10戸の三更集落は、集団移転を余儀なくされ、各地に分散され、集落廃村という、金山町昭和史上の悲劇の歴史を辿ることとなりました。

この集落の廃村に伴い、集落と対岸の早戸との間を繋ぎ、地区民の暮らしと命を守っていた渡し舟もその役目を終え、永い歴史に終止符を打つ事になりました。

三更集落では、この渡し舟が対岸に渡る唯一の交通手段であった為に、まだ小学校にも上がらない子供達まで、誰でもが自ら船頭さんになって舟の操縦をしていました。専門の船頭さんがいないこの渡しでは、自分で舟を操作しなければ、川を渡ることが出来なかったのです。

大雨の日も、大雪の日も、台風の日も、激流に舟を漕ぎだし、遠い下流まで流されて大変な苦勞をしながらこの川を渡っていました。

三更集落の上流の堂岩地内では、慶長16年（1611年）8月21日の会津大地震で、シラス層が大崩壊をおこし、大量の土石が只見川をせき止めて、人造湖を形成し、上流の関根集落が水没して、対岸の宮崎集落に移転をするという大災害の歴史があり、これを「堂岩崩れ」としてその恐ろしさは今に伝えられています。昭和のブナ坂崩れは、350年の時を経て、再び三更集落に牙を剥く事となったのです。



⑬早戸温泉・つるの湯

大同年間徳一大師が三坂山に大高寺を建立し、隆盛を極めた恵日時の末寺として、この地は官領から寺領となりました。

これより凡そ遡ること30年。「宝亀二年金山谷早戸村に温泉出る」と文献に記載されています。

千二百年の昔、住む人として希な秘境只見川大溪谷の巨岩の下に、一羽の鶴が飛来して動きませんでした。

怪しんだ農民が覗き見たところ、清冽な温泉が滾々（こんこん）と湧き出でて、鶴が傷ついた足を浸しているではありませんか。早速自らも入浴を試みたところ、一浴にして手足の傷や腰痛疲れが癒され、魔法の如きその効能に驚愕したと伝えられてい



ます。

それを伝え聞いた近郷近在からは入浴を懇願する声が溢れ、人助け為ならばと湯治場を造ったのがつるの湯温泉の由来で、いにしへの辺境の果てにあって、つるの湯は住民の命を守る至宝の温泉であったに相違ありません。

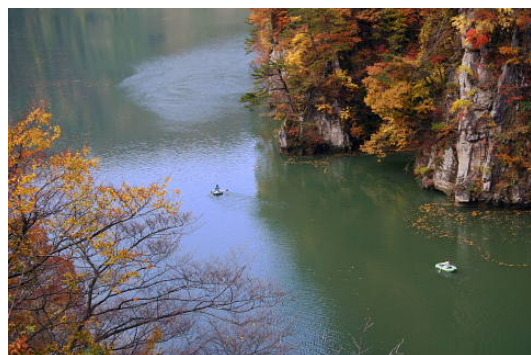
戦前にかけては、只見川の激流を利用した、さながしや筏運搬が隆盛を極め、早戸温泉も筏職人達の宿場温泉として、大いに賑わっていました。多くの湯治客で溢れかえっていた名湯も、しかし時代の趨勢には逆らえず、後継者難から廃絶を余儀なくされようとしていましたが、2004年名湯の危急存亡に立ち上がった住民の熱意が町を動かし、日帰り温泉をプラスさせて、又新しい歴史を只見川溪谷の桜並木に沿って大きく展開させています。

⑭湯の上場崖（ばっけ）（エメラルドバットレス）

巨大な場崖を指して、住民は畏怖の念で「ばっけ」と呼んでいました。

この「湯の上場崖」はまさに只見川を代表する、壮大無比な断崖で、高さ56mその幅200mといわれています。上部に架かっている橋は早三橋で、国道252号線と沼沢湖をつないでいます。

ダム湖の湛水により、断崖はその姿の3/1を水中に没しましたが、90mもの高さにまで達していた奈落の断崖と狭隘の地形は、只見川の激流を更に跳躍させて、ここから1km間は「ダイコンおろし」と呼ばれ、岩をも噛んだ激流は、多くの沢流し（さながし）や筏職人の命を奪った魔の峡谷として恐れられていました。



湛水に半身を没したとはいえ、この「湯の上場崖」は、只見川の深山幽谷の原始の姿を今に伝える貴重な断崖でもあり、この遊覧航路見所のハイライトでもあります。



戦後の昭和25年にこの地に降り立った作家の中山義秀が、「逃避行」という作品の中で只見川の溪谷をこう描写しました。

…清流が緑磐岩（りよくがんばん）の断崖の間に
蒼青とした淵をつくり、
崖上の松と対照して細長く美しい…





周囲を圧倒して勇壮無比に屹立している「湯の上場崖」のスラブは、一方で只見川のエメラルドグリーンをそのまま岩盤に投射させ、巨大なスラブを宝石の屏風のようにきらきらと輝かせて、神秘でファンタジックな表情をも見せてくれます。その煌めきの見事さから「エメラルドバットレス」とも呼ばれています。



◎沼沢沼発電所

戦後に建設された沼沢沼発電所は、揚水式発電所としてはかつて東洋一を誇りましたが、設備の老朽化や効率性の問題から近年廃止となり往時の面影は発電所建屋の敷地と、上池沼沢湖とを結んだ導水管路跡が当時の隆盛を辛うじて忍ばせています。